

戦国の女性たち

下之巻

吉留路樹著

よしとめ／ろじゅ

1925年7月21日生まれ。本籍長崎県。

〔最近の著書〕「馬賊物語」「私鉄への告発状」

「21世紀への海洋開発」

「住宅策戦必勝法」

〔現住所〕東京都練馬区石神井町8丁目32の5

戦国の女性たち（下之巻）

600円（〒70円）

昭和45年8月20日 初版印刷

昭和45年8月25日 初版発行

著者 吉留路樹

発行者 岡本正一

発行所 株式会社 霞ヶ関書房
東京都中野区江原町2丁目1番7号
電話 03 (951) 3407
振替 東京 26254番

印刷所 研友社印刷株式会社

製本所 富士製本株式会社

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします（検印廃止）

0093—701623—0933

戦国の女性たち

下之巻

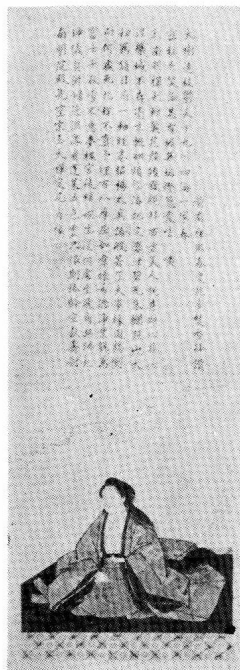


霞ヶ関書房

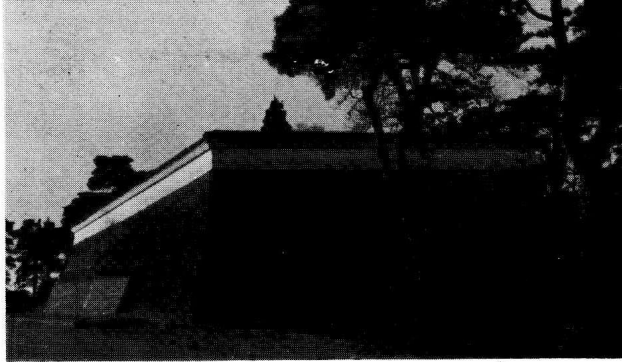
神津島に眠る聖処女ジュリア

(本文なびかぬ花参照)





南明院旭姫画像
(静かなる生涯参照)



＜上・中＞青葉城（お妾拝領参照）…宮城県写真提供



大和郡山城址
(幸福の行方参照)

沼田城趾

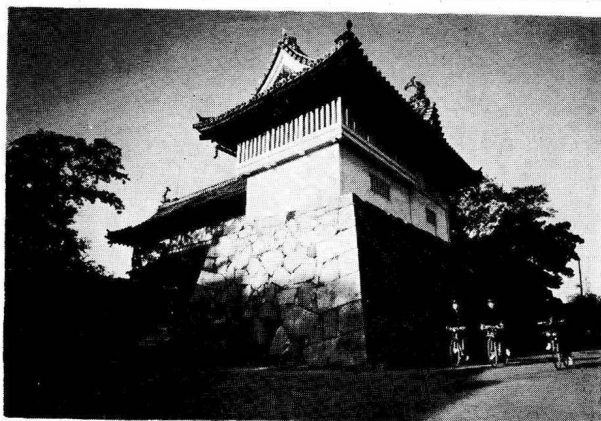
(雪の墓標参照)



佐賀城

(天下り妻参照)

…写真提供佐賀県



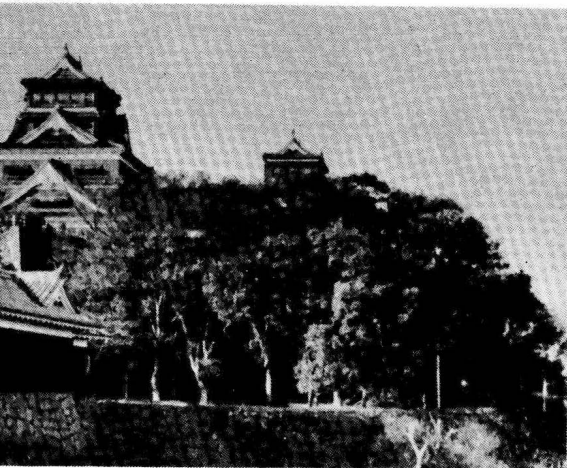
福厳寺 (まだら鴉参照)





徳島城趾

(腹ぼて市縁起参照) …写真
提供徳島県



熊本城

(梅の実はならず参照)

忍城趾

(ここに武士あり参照)



結城城趾 (嫌われたそばかす参照)



目次

まだら鴉……………(福岡) …… 11

お妾拝領……………(宮城) …… 41

ここに武士あり……………(埼玉) …… 61

梅の実はならず……………(熊本) …… 81

幸福の行方……………(奈良) …… 101

静かなる生涯……………(静岡・京都) …… 131

腹ぼて市縁起……………(徳島) …… 153

雪の墓標……………(群馬) …… 175

噓つき姫……………(大阪) …… 197

嫌われたそばかす……………(茨城) ……219

なびかぬ花……………(東京) ……245

天下り妻……………(佐賀) ……263

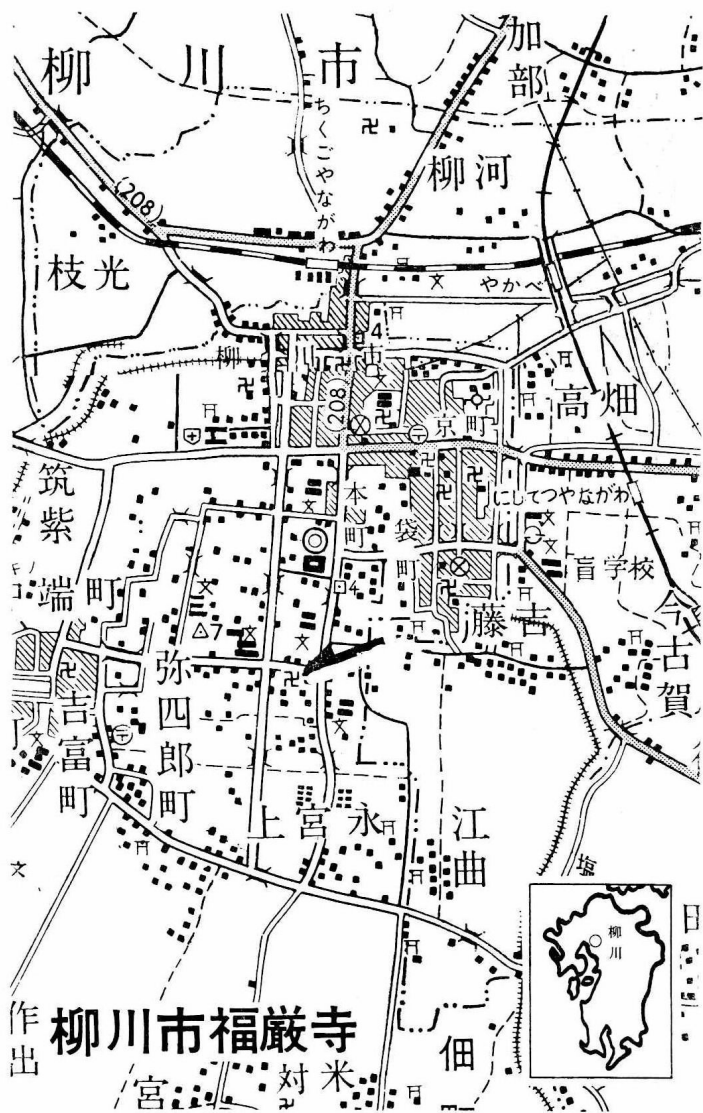
解 説

徳永隆平……………291

戦国の女性たち

下之巻

まだら鴉



一

夫婦離別の原因の一つに『性格の不一致』という名目がある。

なに気なく世間も当人たちも、至極もつともな理由のように見過しているが、しかし、人間の性格というものは一致する方が奇妙なのであって、むしろ正確には、不一致こそ夫婦和合の基本的要件であろう。第一、自分とまるでそっくりな性格の持主が傍そばにいたとしたら、薄気味が悪くて仕様がなない。

個性的な男——と、言うより、男っぽい男ほど女らしい女を求め、女性もまた男臭プンプンたる男性に惹かれるものだ、私の周囲の女らしい女は語ってくれた。

立花宗茂は、戦国を代表する男っぽい男の代表的武将であつた。従つて彼は、ナヨナヨとした柳腰の女性に魅力を感じ、触れなば折れんといった風情に接すると、ただそれだけで全身の血が燃え上る熱情を秘めていた。

ところが生憎彼の妻閨千代ぎんちよは近隣名負うての美女ながら、実父戸次鑑連べつぎあきつらの血を享け継ぎ、西国随

一の譽ほまれも高い女丈夫だった。若しも彼女が、出生の時期を四世紀ほどずらしていたら、可もなく不可もない男どもを尻目に、天晴れ女傑として罷り通ったであろうが、戦国争乱の真唯中に生れ、しかも夫に立花宗茂という無双の豪傑を得た事實は、彼女にとって二重、三重の不運であったようだ。

二人の性格は不一致どころか、まさに同型に近いと言えた。ためにこの二人は、時として求め合う場合もあったが、外見しか窺い得ぬ他人の眼には、絶えず競い合い、反発し合う間柄として受けとめられた。

關千代の父鑑連は立花城に拠り、隠居して道雪と号したが、宗茂の実父高橋鎮種と共に大友宗麟の双壁と謳われていた。

この城の養子となつて宗茂が入婿したのは、天正九年十月、彼十三歳の秋である。当時の筑後地方は、大友氏に隸屬してはいたが、南に島津、西に竜造寺、北には秋月などの列強がひかえており、寧日なき戦火に明け暮れていたから、少年の日の宗茂は好き嫌いに關係なく、強く逞ましく生きる戦争の哲学を身につけて行つた。

ある秋のことだ。

宗茂は養父道雪と共に、立花城から程近い山道を歩いた。

「よいか、彼方にある矢部川を押し渡り、敵の大軍が押し寄せるとした場合、この山に数百の兵を

伏せる。本軍は城を打って出るが、敵を十分に引きつけて置き、適を側面から伏兵が討つのじゃ」

道雪は陣太刀を杖代りにして、仮定の陣形を示した。七十数年の人生を、殆ど

道雪には、鷹狩りも合戦、散歩も軍略研究の場である。宗茂は養父の一語一語に耳を傾け臨んだ際を想像して血を沸らせた。

「城を出るより早く、この付近一帯を敵に奪われたとする。立花城は孤立無援、そなたならどうするぞ」

道雪の眼が鋭く光った。宗茂は一瞬、実父の城岩屋や宝満城を思い泛べ、援軍の到来を待ったため籠城を胸にえがいたが、しばらく考えた末、意気込んで答えた。

「はい。私なら籠城の策をとるとみせかけ、機を見て夜討ちをかけます。目指すは敵の大將唯一人、これさえ討ち取れば如何なる大軍であっても、一気に崩れ去るであります。坐して自滅を待つより、玉砕覚悟の奇襲にこそ、活路を見出すものと存じます」

「ほう、夜討ちか——」

道雪は老いの眼を細めたが、何を思ったのか、家来たちと共に離れたところにいた間千代を手招いた。そして、宗茂に発したのと同じ質問を彼女にあたえた。と、宗茂より二歳年長の少女は即座に答えた。